

〈研究会報告〉

## 第45回例会報告

2000年6月3日(土)に、本会の第45回例会が筑波大学学校教育部において行われた。例会で行われた佐伯真人氏(富山大学教育学部)の講演と、田中清一氏(長野県佐久町立佐久中学校)の実践報告の要旨は以下の通りである。

### これからの歴史教育

—高等学校・地理歴史科の改訂から考える—

佐 伯 真 人\*

今回の学習指導要領の改訂は、[ゆとり]の中で[生きる力]を育てることを基本とした平成8年7月に公表された中教審第1次答申に基づいている。この答申では、これからの学校教育は、生きる力を育成するという基本的な観点を重視した学校に変わることが必要とされ、学校の目指す教育は「知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から、子どもたちが自ら学び考える教育の転換を目指す」ことが示された。

これを受けて進められた教育課程審議会の答申が平成10年7月に公表された。教育課程の基準の改定に当たっての基本的な考え方の中で子どもの現状として学習状況はおおむね良好だが、問題もあるとして、多くの知識の詰め込みになっている、ゆとりのない学習で教育内容を十分理解できない子どもが少なくない、受け身の学習で自分で調べ判断し、自分なりの考えをもち、それを表現する力が十分でない、多角的なものの見方や考え方が十分でない、学習への意欲が高くないなどの問題があることがしてきされている。

こうした認識の上に教育課程の基準の改訂が図られたが、中学校社会科における改訂は、時間数の削減の中で内容の厳選を進めると共に、学び方を学ぶことを一層重視した作りになっている。歴史的分野は我が国の歴史の大きな流れを捉えることをねらいとするとともに、新たに「歴史の流れと地域の歴史」という大項目を設定して、学び方を身につけることを重視している。こうした中学校における歴史学習の改訂は高等学校における世界史・日本史の学習と大きくかかわっている。

高校の地理歴史における科目設定や履修については現行と変わっていない。その中で内容としては、指摘を重点化できるような内容構成を見直し、すべての科目に主体的に追求させる学習を取り入れ、調べ方や学び方の学習を充実させるようにした。例えば、世界史Bにおける「世界史への扉」や日本史Aの「歴史と生活」、日本史Bの「歴史の考察」など、新たな大項目を設定し、主題を設定し追求する学習を重視する構成になっている。

具体的に各科目の改善点を見ると、世界史Aは、前近代を一層精選し、16世紀以降の一体化する世界を重視した。また、20世紀の展開を通時的に概観した後に、人類の課題について主題を設定して追求する学習を取り入れ、生徒の主体的な追求を促すようにしている。また、世界史Bでは、導入として歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高めることをねらいとして、身近なものや日常生活にかかわる主題など、適切な課題を設定して追求する学習を行う「世界史への扉」を新設するとともに、第二次世界大戦の学習は主題を設定して追求させる学習を取り入れている。

日本史Aは、前近代を大幅に削除するとともに、主題を設定して追求する学習として「歴史と

生活」を設定している。また、日本史Bは、「資料を読む」「資料にふれる」を内容に持つ「歴史と資料」、主題を設定して追求させる学習である「歴史の追求」、それに「地域社会の歴史と文化」の三つの項目を含んだ大項目「歴史の考察」を新たに設け、歴史学習の基礎的な認識を深めるとともに生徒の主体的な学習を促すようにしている。また、通史的部分においても調べ考えることを重視した「考察させる」ことを大切にしている。

こうした改善を図ることにより、細かな知識の注入になりがちである歴史学習から、歴史的思考力を培うという科目の目標を実現できるような学習に転換することを求めている。

# 考えられる・表現できる・行動できるヒトを育てる社会科とは？

—公立学校での2年間の実践から学び考えたこと—

田中清一\*

## 1. 子どもどうしの発言が授業を動かす

授業準備もままならぬまま、教室へ重い足取りで向かうときは少なくない。廊下を歩きながら、授業の流れ・板書の計画を立てられるような器用さは持ちあわせていない。そんな時、自分の中に「うまく進めなければ」「うまく教えなければ」という強迫観念が巣くっていることに気づかないものだ。

初任の年、東南アジアの学習でのこと。単元全体の流れは一応できあがったものの、実際に子どもたちと授業を進めていくと、どうしても気持ちの入った、いわゆる「ノリの良い」授業にならず、ガラにもなく悩んでいた。悩みつづけたまま、単元の核心にあたる授業の当日になってしまった。

「日本は森林資源に恵まれているにもかかわらず、東南アジアなどから外材を輸入しているのはなぜだろうか？」—この問題から、今後どのような展開があり得るのか。ここは単元全体の中でも、核心に迫る時間につながる大切な場面。どうしたらいいのだろうか。迷い悩みあぐねたその時、ぱっと思い浮かんだことがあった。

「そうだ。子どもに任せてみよう。子どもに何ごとかを存分に語ってもらおう」

この授業。結局、子どもに任せたその一時間をきっかけに、学びの場は教室を飛び出し、地域の森林組合・林業関係会社への聴き取り調査、そして熱帯材の輸入の是非をめぐるディベートへと発展的に広がっていった。とどのつまり、一番その場で学んだのは、子どもたちではなく私だったわけである。真の意味で、授業を子どもに「任せる」ことの大切さを、身にしみて学んだ、そんな素敵な時間であった（詳しくは、拙稿「世の中のわからなさをわかる社会科」【信濃教育】1998年12月号）。

## 2. 表現の場の「強制」が子どもを動くようにする

「田中先生の社会科、レポート書かないといけないから嫌だなあ」

こんな言葉を聞くと、不謹慎にも私は無性に嬉しくなってしまう。レポート学習は、私が唯一、この2年余りの実践の中である種の信念—書くことは考えること—を持って続けてきた学習だからだ。

レポート学習は、教師が提出されたレポートを読む手間ひまを考えると、仕組むに躊躇を感じずる実践だ。しかし、課題内容の質を変えたレポート学習（課題追究型・事実究明型・意見提言型など）は、回数を重ねていくことにより生徒たちの意識の中に、自ら調べ、疑念や不明点を自ら根拠を示しながら追究・解明していくこと＝学ぶことのおもしろさを体得させ得ることがわかってきた。

夏休みの自由課題レポート—先祖の地を訪ね、はるばる滋賀県まで取材を敢行したK君のレポート。授業で扱った佐久町の花弁栽培に関心を持ち、役場やJAで集めた資料を元に優れた分析をしたレポートを仕上げたAさんとMさん。若者文化として「ブランド」とは何かを、非常にシャープな視点で考察したYさんの大レポート。どのレポートからも、個性という名の“宝石”の

\*長野県佐久町立佐久中学校

輝きが燦然と放たれている。

「最初は田中先生がキライになるくらいレポートってキライだったけど、自分がわかるまで調べられる、納得いくようにきれいに楽しく書けるレポートは、今は大好きです」

(Rさん)

こういうコメントを残してくれる子どもたちがひとりでも多く出てくれたらどんなにか素晴らしいことかと思う。しかし、私が実践しているレポート学習にはまだまだ課題も多い。何より、子どもたち相互のレポートの、相互評価の場を設定し得ていない点。これが一番の問題点であり、これから研究を進めていくべき点であろうと考えている。学校教育における学びとは、学びあいとその本質にあると思う。個に閉じた学びだけでなく、多様性の中における学びあいこそを、授業という創造的な場で子どもたちとともに創り上げたい。

### 3. 学び続ける教師でありたい

授業という場は本来、創造的な場であると思う。その創造的な場を、かくあらしめるためには、仕組み手である教師が創造的な存在でなければならないだろう。では、創造的な存在とはどのような存在だろう。私は、それは学びの楽しみ(funny & interesting)と知っていることと理解している。学ぶことの本当の意味での楽しさを知らぬ者が、いけしゃあしあ教師面して子どもたちと授業などできないのではないか。教師は教授(instruct)のプロであると同時に、学び(learn)のプロでもなければならないと思う。

私は、学びの世界の楽しさを心底より知る教師でありたい。そしてさらに、学びの世界の厳しさや奥深さをも知る人間でありたいと思う。なぜなら、そうあればこそ、子どもたちとともに授業という場を、真に創造的な空間ならしめることができると思うからである。